



佳作

人生を持った

アジアゾウのはな子

水野 菜桜

一

武蔵野に独り法師の花子さん

我等3代あなたの友達

ありがとう

これは、東京都武蔵野市の井の頭自然文化園にある、
 思い出ベンチのプレートという言葉。個人の見学者の方の思
 いを、プレートに彫ったものだ。

思い出ベンチは、アジアゾウのはな子の運動場の真向
 かいにある。混んでいて人だかりができていれは無理だ
 が、すいているときなら、ベンチに座ればすぐ真向かい

で、はな子の様子を見学することができる。

3代ではないが、私は、小さい頃からずっとはな子
 が友達だった。井の頭自然文化園は、私の住んでいた
 阿佐ヶ谷から近かったので、もの心ついた頃から、両親
 に連れられてここへ通っていた。月に一、二度は来てい
 た。幼稚園の遠足もここだった。友達とも来た。ゾウも
 モルモットも鹿もアライグマもニホンザルも、みんなこ
 こで初めて見て知った。

上野動物園や多摩動物公園のように、日本中から人が
 集まる大きな動物園ではなく、武蔵野の森の中にある、
 静かなこじんまりとした動物園だ。地域の人たちが安心
 して集える感じの施設である。

ここでなんといってもだんとつ人気なのは、アジアゾ
 ウのはな子さんである。子どもたちだけでなく、年配の
 人にも大変人気がある。はな子に会うために毎日通って
 くる人も珍しくない。東京だけでなく、はな子ファンは
 全国に大勢いる。

はな子は雌で六十六歳、日本で一番長寿のゾウとして

有名だ。長生きというだけでなく、波乱に満ちた運命をたどってきたので、本にもなっているし、ドラマにもなっている。きっと日本で一番有名なゾウではないかと思う。

はな子の飼育員で、はな子からの信頼がとても厚かった山川宏治さんによれば、

「たぶんはな子は、いちばん人間に近いゾウです。いろいろな悲しみも喜びもたくさん味わって、〃人生〃というものをもってしまったゾウなのです」

ということである。

私は、小さい頃、ここへ遊びに来るたびに、はな子の運動場の柵の前に立って、長いこと動かなかったそうだ。あまり記憶はないが、はな子さーん、と大声で呼んで手を振っていた覚えはある。

自分で覚えている限りでは、最初のうちはただ、とても大きな、と思うだけだった。それが、年を重ねるにつれ、別な感情も抱くようになった。いつも一人ぼっちでやることもなく、退屈そうな様子で、片足をゆらゆら

と、上げたり下げたりしている。ずっとそうしている。仲間のゾウもいなくて、どこか寂しそうな表情をしていた。どうしてこういう様子なのだろう、思った。

片足を上げたり下げたりするしぐさは、癖だとも言われるし、ストレスからだとも言われている。山川宏治さんの本によれば、「ひとりぼっちの退屈をまぎらわすために、仕方なくしている行為です。そのひとりぼっちは、肌をこすり合わせる仲間がいらないというひとりぼっちです」とある。

いつからか、私ははな子をかわいそうに思うようになった。

——自分がゾウだったら、一人でこんな狭い、コンクリートの運動場にいるのは嫌だ。森に帰って走り回りたい。もっと広いところを自由に思い切り走ってみたい。仲間のゾウとたくさん遊びたい。

たぶん、私と同じように感じる見学者は多いのかもしれない。だからよけいに、はな子ファンは多いとも考えられる。

でも、はな子はもうおばあさんである。走りたくはないかもしれない。広すぎても、歩くのに疲れるかもしれない。この運動場がはな子にいいのかどうかは、人間にはわからない。はな子にしかわからないのだろうと思う。

ときどき、飼育員の人が出て来て、はな子さんの身体を竹ぼうきでかいてやったり、顔を触ったり、ホースで水をかけてやったり、足の裏を洗ってやったりしていた。すると、はな子は本当に嬉しそうだった。見ている私も嬉しくなった（現在は、後に述べる理由で、飼育員がはな子と触れ合うことはない）。

はな子の目は小さいが、あまり混んでいないとき、じっと見つめると、こちらを見つめ返してくれる。何か、話しかけてくれている感じがする。かわいい目だが、どこか悲しそうにも見える目だ。私ははな子の歴史について調べてみたくなり、小学校二年生のとき、『ゾウのはな子さん新聞』を作った。その過程で、はな子の悲しい歴史も知った。そして、はな子のことをもっと知

りたいと思うようになった。

はな子については、いろいろな人が書いているけれど、私ははな子について書いて、たくさんの人に知ってほしくなった。そしてみんながいろいろ考えて、動物にやさしくなってほしい、と思った。

次の章から、はな子の今までの歳月を、順を追って見て行きたい。

二

はな子は、一九四九年八月二十二日、今から六十四年前の夏に、故郷のタイを出発し、九月二日に神戸港に到着した。まだ名前はなく、タイ語で「子ゾウ」を意味する「ガジャ」とか「ガジャ子」などと呼ばれた。このときの朝日新聞には、「ガジャ嬢、今夕都入り。伝えられたよりも小さく、二歳半で身長四・二フィート、体重約百貫という可愛らしさ」とある。四・二フィートは約一・二八メートル、百貫は三七五キログラム。ゾウは人間と同じ年の取り方をするというから、二歳半といえ

ほんの赤ちゃんゾウだ。読売新聞には「豆象ガジャ子さ
んいよいよ今夕東京入り」。

両方の新聞に大きく写真が載っているが、はな子は隣
に立った大人の女性よりだいぶ小さく、小学校高学年程
度の男の子よりもまだ小さいぐらいの体高で、確かにと
てもかわいい。頭からお尻までは約一メートル。こんな
に小さくてかわいいゾウなら、私もなでてみたいと思っ
た。たくさんの人たちがはな子をとりまき、大歓迎して
いる様子がわかる。

はな子を東京まで運ぶ列車は、止まる駅ごとに、子ゾ
ウをひと目みたいという人でいっぱいになり、列車の終
点の汐留駅は、見物の人であふれかえった。上野まで運
ぶトラックは、人だかりでたびたび立ち往生した。上野
に着いたときは、五万人という大勢の人が、はな子を出
迎えて熱狂的な歓迎をしている。

一九四九年といえば、戦争が終わって四年目だ。よう
やく日本が立ち直りかけた頃だと考えられる。しかしま
だ、戦争の傷跡は国中に残っていたと思うし、人びとの

心も深く傷ついて治ってはいなかったらう、と思う。

そんな日本へはるばる、子ゾウのガジャ子がやってき
た。大人も子どももどんなに大喜びしたか、なんとなく
わかる感じがする。希望の光、といわれた意味も理解で
きる。

当時、日本には名古屋に二頭しかゾウがいなかった。
戦時の猛獣処分で全国の動物園からは、ゾウだけでなく
いろいろな動物が消えていた。子どもたちは、ゾウを実
際に見てみたい、という願いを持ち、やがて全国的なゾ
ウさんブームが起こる。そんな子どもたちの願いを引き
受けて、タイが、ガジャ子を送ってくれた。こうしてガ
ジャ子は、戦後初めて日本にやって来たゾウとなる。
ひと月ほど後になったが、インドからは十五歳の雌ゾ
ウ、インディラが送られてくる。ガジャ子のためには、
大変なお金がかけられた。赤い立派なガウンも用意され
たし、特別仕立ての貨車も作られた。当時の日本として
はおそらく、出来る限りの歓迎の気持ちを表したのでは
ないだろうか。ガジャ子の神戸港から東京までの運賃

は二万円。当時の物価の目安としては、納豆（百グラム）八円、あんぱん一個十円、小学校の先生の初任給三千九百九十一円というから、神戸から上野に運ぶだけでも、相当な金額がかかったことがわかる。

それから間もなく、公募で決まった名前「はな子」の贈呈と命名式。読売新聞一九四九年九月十一日号には「（はな子が）おめめをバチクリ大喜び」「新しい名前とおべべに喜ぶはな子さん」と大きな写真が載っている、はな子が喜んだというよりは、人間のほうが大喜びだった様子がわかる。

戦後の日本の希望の光、とはいえ、なぜ一頭の子ゾウが、当時の日本中の子どもたち、大人たちから、こんなにも熱烈に歓迎されたのだろうか。

それは、公募で決まった「はな子」という名前によく表れている、といわれている。

以前、上野動物園には、戦争で餓死させられた三頭の子ゾウ、花子（ワンジー）、ジョン、トンキーがいた。はな子の名は、そのうちの頭、花子にちなんでい

る。花子、ジョン、トンキーは物語にもなっていて、とても有名な三頭だが、私も次の章で触れていきたい。

三

はな子が日本に到着する前に殺された、もう一頭の花子（ワンジー）とジョンとトンキー。上野動物園で飼育されていた、三頭の子ゾウたちだ。

戦争が起こると、戦時猛獣処分という命令が各地の動物園に下った。もし、空襲で動物園が破壊されたら、猛獣が町へ逃げ出して危険なことになってしまう。そうならないために、猛獣はできるだけ早めに処分するように——これが命令の理由だった。

当時の東京市からも上野動物園に、「すべての猛獣を殺すように」という命令が出た。そこで、ライオンやヒョウはエサに毒をまぜて薬殺。シロクマはワイヤロープで首を締める。ゾウにも毒入りのエサを与えた。ところがゾウはとても頭がよく勘が鋭い動物で、毒を混ぜたエサはあっさり見破って手をつけない。ついに、餓死

というもつとも辛い方法が取られることになった。最低でも一日に百キロのエサを必要とするゾウたちは、みるみる痩せていった。エサをもらいたくて、がりがりに痩せた身体で飼育員に芸をしてみせた、という悲しい実話も伝わっている。当時の飼育員の渋谷信吉さんは、「うらめしそうな目で見られると、いても立ってもいられなかった」と書き残している。「一週間目のころ、隠れてそつと水を飲ませた」ともある。

毒入りのジャガイモを飼育員に投げ返したジョンは絶食から十七日目に、音をたててゾウ舎の床に崩れ落ちた。初代花子は十八日目。飢えに苦しみぬいた末、トンキーがようやくやく目を閉じたのは、三十日後のことだった。

私は戦争を知らない。けれど、戦争とは、なんて恐ろしいものなのだと思う。花子とジョンとトンキーの悲しみを思うと、涙が出てくる。当時の飼育員の人たちも、どんなに辛かっただろう。こんな思いを自分が経験しなくてはならなかったとしたら――。とても耐えられな

い。

戦争は人間も殺す。動物も殺される。何故こんなことを大人はするのだろうか。深い悲しみと怒りを感じる。

ガジャ子に贈られた「はな子」という名前には、戦争中に死なせてしまった三頭のゾウへのお詫びの思いがこめられていた。小さな子どもたちはただ、子ゾウの珍しさとかわいさにはしゃいでいたかもしれないが、大人たちにはもつと深い別な思い入れがあったのだ。

四

喜ぶ人間たちを見て、はな子は嬉しかったのかどうか。はな子にしかわからないことだが、私は、はな子も嬉しかったのではないかと思う。ゾウはとても知能の高い動物だ。自分を見てこんなにもみんなが喜んでくれれば、はな子もまずいい気持ちだったのではないか。

一方で、タイを出発し、長い間、船に乗せられ、気候の違いに日本に連れて来られたのは、大きいストレスだったとも思う。ゾウは群れで行動する動物だ。二歳半の子

どものゾウが、お母さんゾウや群れのゾウと引き離され、一人ぼっちで暗い船の輸送箱の中に十二日間も閉じ込められ、知らない国にやって来た。びっくりしただろうし、群れのゾウが恋しくなっただろう。

ただ幸運だったのは、飼育された上野動物園で、とても賢く大人しい性質のお姉さんゾウ、インディラと一緒に過ごすことができたことだ。赤ちゃんゾウのはな子としては、インディラがお母さん代わりだったに違いない。また、はな子の初代の飼育員だった渋谷信吉さんは、戦時の猛獣処分で花子、ジョン、トンキーを殺さなければいけなかった辛い記憶があることもあり、はな子にはとてもやさしくしてくれたようである。ただ、つつい甘やかせてしまった、という渋谷さんの告白もある。

「悪さをした場合、思いきりムチでたたき、その場で注意しないとなかなか覚ええないのに、いつか手かげんをしてしまったのである。・・・怒っても私の言うことを聞かないのだ」（渋谷信吉『象の涙』）

はな子は、小さい頃から、いたずら好きで甘えん坊、寂しがりやお茶目だったようだ。後にはな子を世話した飼育員の山川宏治さんが、著書『父が愛したゾウのはな子』でそう語っている。また、その甘えん坊で寂しがりやなところが「はな子のいちばんの魅力であり、どこか人間っぽいぬくもり」ともいう。

インディラやさしい飼育員さんと過ごした、上野動物園での四年間の日々は、はな子の人生の中でも幸せで穏やかな日々だったようである。

上野動物園で飼育されていた間の一九五〇年から一九五一年にかけて、はな子は東京都内をめぐる移動動物園に出かけている。上野にはなかなか来られない遠くに住む子どもたちにも、動物を見せてあげるための企画で、はな子とライオン、マントヒヒ、ツキノワグマの子などがトラックで輸送され、都内の各地で「都下移動動物園」を行った。子どもたちには大人気だったが、わずか二週間ほどで、上野⇄井の頭自然文化園⇄世田谷⇄八王子⇄七生村（現在の日野市内）⇄立川⇄五日市⇄青梅

市井氷川町（現在の奥多摩町）市井の頭自然文化園へと戻った旅は、とても疲れるものだっただろう。ストレスも溜まったに違いない。

この移動動物園はその後も続けられ、また二週間ほどすると、今度は汽船に乗せられ、伊豆大島へ向かう。島では、老若男女から大歓迎されたが、散歩の折り、やぶの中への大脱走事件を起こしたりもして、やんちゃな女の子だったことがよくわかる。同時に自分には、自然の中で自由に走り回りたくなった子ゾウのはな子の気持ちだが、苦しいぐらいよくわかる気がする。

移動動物園が終わってから一九五四年まで、はな子はインディラと上野動物園で穏やかに過ごした。しかし一九五四年に、移動動物園先として訪れたことのある井の頭自然文化園から、「うちの動物園にはな子をもりたい」という話があった。そしてそれまでゾウのいなかった武蔵野の小さな動物園に、はな子は一人で引越すことになる。そのとき別れた仲良しのインディラとは、もう二度と会うことはなかった。インディラは

一九八三年に、上野動物園で四十九歳で死んでいる。インディラだけでなく、ゾウという自分と同じ種類の動物と会うことさえ二度となくなってしまった。群れで暮らし、仲間と助け合って生きていくゾウという動物にとって、とても残酷なことをしたように私には思われる。

人間の子どもたちを喜ばせるために、戦後の傷ついた大人たちに希望を与えるために、はな子はあちこちを移動し、人間を楽しませてくれたのだな、と思う。人間にこんなにいろいろなものを与えてくれたのはな子だけけれど、人間の側に、はな子への思いやりはあったのだろうか、と考えさせられてしまう。もちろん、上野動物園の飼育員さんたちは、一生懸命はな子を世話し、大切に育ててくれたし、別れのときは辛い思いを我慢しただろう。けれどはな子にかかったストレスと悲しみは大ききく変わっていく。井の頭へ移ってから、はな子の運命は大

五

たった一頭になり、慣れない狭い場所に置かれたはな子は、ストレスからいろいろな問題行動を起こす。井の頭文化園では叱られることが多くなった。ゾウ舎の壁を思い切りけり飛ばし、大きな穴を開けて、しばらく足をつなげたこともある。群れ意識の強い動物なのに、まだ七歳のはな子が一人で初めての環境に耐えるというのは、相当辛い経験だったことが想像できる。相手は生き物なのだ。もう少しなんとかしてやれなかったものか、と思う。

最初の不幸は、井の頭自然文化園に来てから二年後に起こった。近所に住んでいた男性が、深夜酔っぱらって、ゾウ舎に忍び込んだのだ。驚いたはな子はパニックになり、男性を踏み殺してしまう。これは避けられない事故だったと言ってしまう。が、四年後にはな子は、再び人身事故を起こす。

上野動物園から、はな子のために一緒に井の頭文化園についてきていた飼育員の男性を、何があったのか踏み

つぶしてしまふ。ゾウ舎で何が起こったのか。今でもわかっていない。

翌日の新聞各紙では、事故が大々的に報じられた。

「ハナ子さん 二度目の殺人 ゾウ係踏まれる」

「象のはな子、二度目の殺人 飼育係を踏みつけ 六年の世話もアダ」

あんなに大歓迎を受け、日本中のみんなに喜ばれたはな子だったのに、今度は人殺しゾウとして、みんなから憎まれる動物となってしまった。

二度も人を殺したはな子をどうするか？関係者たちの間ではいろいろな意見が出たようである。「殺してしまおう」とか、「上野動物園に返そう」という意見もあったけれど結局、しばらくは足をクサリにつなぎ、ゾウ舎に閉じ込めておく、ということに決まった。

はな子は前足二本と後ろ足二本、それぞれを一本のクサリで8の字に縛られた。これで前後にはほとんど動けなくなった。さらに前足のクサリ、後ろ足のクサリを、身体の前方と後方、二カ所で柱に繋がれた。横には少し

動けるが、それでもせいぜい五十センチか一メートルの範囲。体長三メートルの象にはほとんど動けない状態と言ってよく、大変な苦痛を伴う。拷問のようだ。この状態で二ヶ月、はな子は暗いゾウ舎に閉じ込められたままだった。実際に、動物虐待だという批難の声もあがった。

このとき、誰もやりたがらなかったはな子の飼育係を引き受けたのが、上野動物園にいた山川清蔵さんだ。

清蔵さんが井の頭に来たとき、はな子は、監禁されたためにエサもほとんど食べなくなり、ガリガリに痩せて肋骨が浮き上がっていた。頬がえぐられたように落ちくぼみ、人間への敵意で目だけがギラギラしていた。清蔵さんは誰もが怖がっていたはな子の世話をどんな気持ちで引き受けたのか。家族にも同僚にもひと言も話さなかったそうだが、奥さんにだけ「あんまりやせていて、あわれなあ」とひと言、言ったそうだった。

そして井の頭に赴任して四日後、清蔵さんははな子の足のクサリを解いてしまった。よほどの決心だったと考

えられる。プロの飼育者として、どこかではな子を信頼してよいと、見極めたのだろう。それから清蔵さんは井の頭から去る日まで三十年間、実のわが子のようにはな子に愛情を注ぎ、大切に育てていく。

ほんの少しの暇でもあればすぐはな子のそばに行き、バナナやリンゴを手渡して食べさせる。話しかける。鼻や目もとを撫でる。身体を撫でる。目を見つめる。必死で、殺人ゾウと言われるはな子を、子ゾウの頃の無邪気にかわいいはな子に戻してやるう、と努力していた。

しかし当時は、世間の目も厳しかったようだ。クサリを解かれたはな子が運動場に出ると、

「人殺し！」

「おまえなんか死刑だ！」

「バカヤロー」

と言って石を投げつける人もいた。

そんなとき、清蔵さんは黙ってはな子の隣に立った。罵声を浴びせる客に抗議することもなく、ただ黙ったまま、はな子の身体を撫でながら、じっと一緒に立って

たという。

六

はな子は井の頭で、清蔵さんたち熱心な飼育員とともに、平和な日を過ごす。

とはいっても、事件はいろいろと起こった。運動場の回りにある堀に落ちてしまい、清蔵さんたちの大変な苦勞の末、引き上げられたり、便秘で死にそうになったり、過去のストレスと栄養不良のために、早くに歯が抜け落ちてしまったり。たとえば、ひとことで便秘という簡単な話のようだが、ゾウの場合それが原因で死ぬこともある。治療するのに、清蔵さんたちがどんな努力をしたか。

はな子のお尻に高圧の水道水を流し込んで、清蔵さんたち飼育係や獣医が四人がかりではな子の腹に、自分たちの頭と肩を押しつけてマッサージする冷水洗腸。はな子の足を固定しているチェーンに、人間も巻き込まれそうになる。注入した水が出たら、また水を入れてマッ

サージ。水は戻って出てくるけれど、便は出ない。こんなことを何回も繰り返したりしている。野生のゾウだったら便秘で死んでしまっているだろうが、清蔵さんたちの命がけの治療のおかげで、最後は便が出て、はな子は命拾いしている。この大変な便秘を、はな子は半年の間に六回も繰り返し、清蔵さんたちの手を焼かせた。

さらに、四本しかないうち三本の歯が抜け落ちてしまった。三十四歳の若さで、たった一本の歯しか残っていないはな子は、もし野生のゾウだったら食べ物をそしゃくできず、死んでしまっただろう。

エサを食べられなくなったはな子のために、清蔵さんたちは試行錯誤の末、さつまいもやニンジンを細かく刻み、おからを混ぜてどろんこ状にした特別食を開発。口に丸めて入れてやると、はな子もご満悦。当時はフードプロセッサなどなく、清蔵さんたち飼育係が、包丁で一つひとつ刻んでいたそうだ。一食作るのに、少なくとも二時間はかかった。三食分の調理だけで六時間。ゾウの飼育員は、ゾウの他にも担当の動物の世話があるから、

どんなに重労働だったかが想像される。

はな子がまだ若くして異常に歯が抜け落ちた原因は、過去のストレス、クサリでつなげられたときに食事を取らなかつたための栄養不良、などが原因と考えられている。

歯が抜け落ちたのは、人間に与えられたストレスのせいだ。しかしはな子は歯が抜け落ちても、野生のゾウとは違って生き延びられた。それは、清蔵さんたち人間のおかげ。クサリにつないだのも人間だし、クサリを解いてくれたのも人間。熱狂的に自分を迎えてくれたのも人間だし、「お前なんか死刑だ」と石を投げつけるのも人間だ。はな子の中で、人間は不思議な動物に映っているかもしれない。

清蔵さんは愛情をいっぱいに注ぎ、自分の全てをかけて、閉ざされたはな子の心を開いていった。それでも、はな子が手をなめてくれるようになるまで六年、瘦せおとろえた身体がもとの身体に戻るまで八年かかったと、後に語っている。

はな子を飼育して三十年後、清蔵さんは定年退職となる。十三歳だったはな子ももう四十三歳。この間、病気で清蔵さんが仕事を休んだことは一度もない。

清蔵さんは、囑託で一年間、後任飼育者を手伝った後、はな子の前から完全に姿を消した。はな子が後任の飼育者に早く慣れるため、はな子が清蔵さんを見つけて混乱しないためだが、やはり清蔵さんにとっても、はな子にとっても、それは身を切られるように辛い別れだったと思う。

その五年後、清蔵さんははな子に一度も会いに行くこともなく、がんで亡くなる。全身全霊ではな子を世話した、はな子に捧げた人生だったと言ってもいい。清蔵さんとはな子の物語は本にもなっているし、ドラマにもなっている。

七

清蔵さんが亡くなってから二年後、息子の山川宏治さんが今度ははな子の飼育担当者となった。賢くて勤のい

いはな子は、宏治さんが、あの清蔵さんの息子だとわかっていただろうか。

私が四歳になるまでは、井の頭自然文化園に、宏治さんも勤務していたはずだ。同園の飼育課主任として、またはな子の担当班班長として、おそらくはな子のそばによく立っていただろう。だから幼かった私はきっと、はな子の世話をする宏治さんを見たことがあるのだと思う。

清蔵さんがはな子の前から姿を消してから一年もしいうちに、はな子は再び事故を起こしてしまっていた。プールに誘導しようとしていた飼育員に、何かの拍子で鼻でアタックをかけ、怪我をさせてしまう。このとき、宏治さんはまだ多摩動物公園に勤務していた。

事故があったため、また、ベテラン飼育員の清蔵さんがいなくなったこともあり、はな子の飼育法は、それまでの直接飼育から、人間にとつて安全な間接飼育に切り替えられた。

直接飼育とは、清蔵さんたちが行っていたように、動

物とじかに触れ合いながら飼育する方法のこと。手渡してエサを与えたり、身体をこすって洗ったり、爪を切ったりできたりできる。間接飼育は、ライオンやトラなど猛獣を扱う方法で、動物と同じフロアに立つことはできない。なでたり、エサを直接手で与えることも禁止。

間接飼育に切り替わったとき、はな子は動揺し、七日間も全くエサを食べなくなったという。群れで暮らすのが本当の姿であるゾウにとって、孤独がどんなに嫌なものなのかがよくわかる。特に三十年間、あんなに清蔵さんにかわいがられて過ごしたはな子だ。甘えん坊で寂しがりのゾウだ。人間が全く自分に近寄らなくなってしまうとき、とても悲しい思いがしただろう。それから六年間、はな子は再び一人ぼっちの毎日を過ごすことになった。

その後、間接飼育では不便なことが多いため、はな子は準間接飼育に変更された。準間接飼育は、間接飼育と直接飼育の中間の飼育法で、檻に一メートルまでなら入ることができる。

はな子が準間接法で飼育されて一年がたったときに、山川宏治さんが井の頭に赴任してきた。

宏治さんは、石川不二夫さんという飼育員と協力し、少しづつはな子への飼育の制約をなくしていく。やがて、父の清蔵さんがしていたのと同じように、直接飼育で飼育するようになる。はな子とのスキンシップ、コミュニケーションも取れるようになり、宏治さんはすっかりはな子と仲良しの友達になった。

私は井の頭自然文化園で、はな子が飼育員の人に足裏を洗ってもらったり、竹ぼうきで身体をかいてもらったりして嬉しそうだったのを見たことがある。竹ぼうきやホースを飼育員さんに貸してもらい、一人で遊んだりしているところも。そのときはな子は、確かに嬉しそうだった。見学している人たちも、はな子が竹ぼうきで身体をかいているよ、とか、ホースで遊んでいるよ、と声をあげて喜んでいたり、笑って、かわいいねえ、と言ったりしていた。

宏治さんは、井の頭に来て三年たったときに、はな子

のふれあいタイムを始める。

『はな子さんにおやつをあげよう』

というイベントでは、お客さんがひと組ずつ、はな子の檻の中に入っておやつをあげる。以前は、飼育員さえ入れなかったはな子の檻に、一般の人たちが入ってはな子と触れ合える。残念なことに、私はやったことがなかったが、夢のような話だと思う。はな子は、小さい子がおもしろがって鼻をたたいても、口の中に手を入れても、じっと落ち着いて黙っている。神経質で気難しくて危険だと言われたはな子が、宏治さんに飼育されて、人を信頼して、こんなにやさしい穏やかなゾウに変わる。

『はな子さんといっしょ』

というイベントでは、運動場にはな子と一緒に入って、写真を撮ったりおやつをあげたり、身体に触ったりできる。

人間もはな子も、とても幸福な時期だったと思う。宏治さんが井の頭自然文化園ではな子の世話をしていたと

き、はな子は清蔵さんと一緒のときと同じぐらい、幸せだったように思える。はな子はもともと、人間が大好きなのだ。宏治さんは、恐れられていたはな子を、再び人間と触れ合えるようにした。

さすがにベテラン飼育員の清蔵さんの息子なのだなあと思う。どんな動物園でもこんなことはできなかった。「はな子だからできた」と宏治さんは言う。はな子と山川宏治さんだからできた。私はそう思う。どんなゾウにも真似のできない、来園者との温かい触れ合い。宏治さんは、無口で仕事ひとすじだった父親の清蔵さんと、あまり話すこともなかったという。ゾウの飼育についても、「手かぎを大切に」ということ以外教えられたことはないそうだが、動物を飼育する心は、父から子へ、言葉はないままにしっかりと伝わっていたのだ。清蔵さんも宏治さんも、精一杯の愛情を注いで、自分の命をかけるぐらいの気持ちで、はな子を飼育したのだと思う。

病気が何かで、ストレッチャーのベッドに横たわり、

意識のない男の子が、はな子のゾウ舎に入ったこともある。ゾウが大好きな子だったので、ひと目ゾウに会わせたい、とお母さんが連れて来たのである。少年は立つことも歩くこともできない。宏治さんはベッドごとゾウ舎に入れてあげて、はな子が男の子の胸を鼻で触れるようにし、触れ合わせてあげた。こんなすごいことができたのも、はな子と宏治さんだからだろうし、触れ合えた男の子やお母さんもどんなにか嬉しかっただろう。はな子は、たくさんの人の人生を作るのを手伝っている。私は、男の子をゾウ舎に入れてあげた宏治さんにも、大きな尊敬の気持ちを持つ。

ありがとう、はな子、と日本中でたくさんの方が、はな子へ感謝の気持ちを抱いている。はな子の姿を見ているだけで、その人生を思うだけで、人間はいやされるし、考えさせられる。特に年配の人は、はな子がやってきた戦後の苦しい時期を生きてきて、自分の人生をはな子に重ねる人も多い。宏治さんもまた、著書『父が愛したゾウのはな子』の中で、「ありがとう」とはな子に言

いたいと書いている。

「はな子を飼育したとか、世話してやったなんてとんでもない。じつは私のほうこそ学ばせてもらっていたのかもしれない。飼育させてもらっていたような気がします。少なくとも、私を飼育者として大きく育ててくれました。ですから今度会えたときは、素直に『ありがとう』と言うつもりです」

八

先日、久しぶりに井の頭自然文化園のはな子に会いに行った。引越越したため、井の頭自然文化園が遠くなって、阿佐ヶ谷にいた頃のようにしょっちゅうはな子を見に行くことはできなくなった。

真夏の暑い日差しの下で、はな子はいつもと同じように、片足をゆらゆらさせながら運動場に立っていた。何年前か前に見たときよりもっと、鼻の色が白くまだらにぬけている感じがした。頭の両脇も、深くへこんでいた。私は大きくなり、はな子は年をとった。

はな子への感謝状や表彰状が何枚も、ゾウ舎の壁に貼ってあった。

「表彰状 アジアゾウはな子殿 戦後はじめて来日したゾウとして著名なあなたは飼育担当者との間に新しい信頼を結びつつ歩んできました。様々な病にも負けず試練を克服し国内最高齢のゾウとして多くの人々から愛され夢と力を与えています。人と動物の共生への理解に寄与した功績は大でありここに日本動物大賞功労動物賞を授与いたします 平成二十三年 七月十五日 日本動物愛護協会 理事長」

他の賞状もすべて、人間がはな子へ感謝するという内容のものであった。

現在の飼育員さんは忙しいご様子だったので、動物がイドの方に、はな子についてお話をうかがった。

今、はな子は、準間接飼育という、飼育員と触れ合うことのない方法で飼育されている。二〇一一年の夏から、直接飼育は中止になり、準間接飼育に切り替えられた。理由は、飼育員が鼻ではじかれたり、獣医が投

げ飛ばされたりしたからだ。たとえば、宏治さんのような飼育員が世話をするなら、直接飼育が望ましいのだから、動物園の飼育係員は、他の動物園への移動がある。

「誰が飼育しても、安全に確実にできるように」

と、事情を動物ガイドさんが教えてくれた。あれほど飼育員と遊ぶのを楽しんでいたはな子、来園者との触れ合いを喜んだはな子だから、寂しがっていることは確かだろうと思う。けれど、だからといって、直接飼育にしてほしい、などと私が思っただけとはいかないだろう。もし世話をする飼育員さんに何かがあつては大変だし、そうなつたら、はな子がまた患者として、心ない人たちから罵声を浴びることになるかもしれない。

現在の飼育員さんたちもまた、さまざまな工夫をして、はな子のためになるよう知恵をしばっている。はな子が退屈しないように、野生ゾウのように頭を使えるように、エサのパンはゾウ舎の柱の裏側、はな子からは見えないところへ、一つひとつ丁寧に置いてあ

る。手間ひまをかけて、わざと隠してあげているのだ。また、食事は一日分だけでも、バナナが二十一キログラム、リンゴが一〇キログラム、ニンジン三キログラム、ダイコン七・五キログラム、キャベツ一〇キログラム、青草十八キログラム、お米二升、食パン五斤、飲み物八〇〜百リットル、黒糖三十グラム、という大変な量だ。バナナをむく、果物や野菜は刻む、お米はメロンほどの大きさのおにぎりにする。これらを用意するだけでも、どんなに飼育員の人の毎日が大変なのがわかる。

一本しか歯のないはな子が栄養をとることができないのも、日本一の長寿のゾウとして生きていられるのも、飼育員さんたちの表には出ない努力のおかげだろう。

運動場の真ん中で、毎日まいにち一人ぼっちで、足を上げ下げしているはな子は、やはりどうしても寂しそうに見える。群れで暮らす動物だから、またあれだけ飼育員さんや来客の人たちと触れ合ってきたはな子だから、今の寂しさは余計に大きいかもしれない。

人間の都合で、故郷を離れ、親と別れたはな子。森を

走ることはできず、狭い動物園の運動場で一生を過ごすことになった。インディラと別れてからは、二度とゾウという動物を見られなかった。人間と親密に過ごせた時期もあれば、全く触ってもらえない時期もあった。そして今、またはな子は一人だ。いつも人間によって運命を変えられて生きてきた。人間とだけ一緒に生きて、人生というものを持ってしまった。けれどはな子は、人間たちにたくさん夢を与え続けてきてくれた。

私たち人間は、はな子に何をしたのか、と考えさせられる。山川さん親子のような、はな子をもっとも信頼できる人間との出会いもあった。一方で人間の都合だけで、はな子を飼育もしてきた。はな子は日本に来て、幸せだっただろうか。

はな子の残りの人生が、穏やかで幸せなものであってほしい、と思う。

今回この作品を書くために、井の頭自然文化園、多摩動物公園の皆様に変なお世話になった。だから、こんなことを思うのは動物園の方々には悪いのだが、私は、未

来は、動物園というものがもっと大きく変化したほうがよい、と考えている。

昭和三年発表の、とても古いものだが、高村光太郎の有名な詩「ぼろぼろな駝鳥」がある。

何が面白くて駝鳥を飼ふのだ。

動物園の四坪半のぬかるみの中では、脚が大股すぎるぢやないか。

頭があんまり長過ぎるぢやないか。

雪の降る国にこれでは羽がぼろぼろ過ぎるぢやないか。

腹がへるから堅パンも食ふだらうが、駝鳥の眼は遠くばかり見てゐるぢやないか。

身も世もない様に燃えてゐるぢやないか。

瑠璃色の風が今にも吹いて来るのを待ちかまへてゐるぢやないか。

あの小さな素朴な頭が無辺代の夢で逆まいてゐるぢやないか。

これはもう駝鳥ぢやないぢやないか。

人間よ、もう止せ、こんな事は。

この詩がすべて正しいと言いたいのではない。今とは動物園の環境も違うだろう。

私は、ゾウもモルモットも鹿もアライグマもニホンザルも、みんな井の頭自然文化園で初めて見て知った。上野動物園でも多摩動物公園でも、子どもの頃の私はどんなに楽しませてもらったかしのれない。動物について教えてもらい、動物を大切に思う心も持つようになった。特に、幼い頃から通い続けた井の頭自然文化園のおかげで、私は動物が大好きになったと思う。動物園に対する感謝の気持ちは本当に深い。

けれど、はな子を始め、動物たちは人間のために生きていくわけではない。このこともまた、動物園から学んだことである。もっと、これからの動物園で飼われる動物は、十分快適に、生まれたところと似た森のような広い場所で、海の動物なら十分に泳ぎ回れる広いプールの中で、幸せに一生を過ごせるようになってほしい。群れ

で暮らす動物は、ひとりぼっちにしないでほしい。未来の動物園が動物を深く思いやるように、変わってほしいと願う。国も、たくさん予算をつけてほしい。私も大人になったら動物のために何かをしたい。人間は、長い歴史をへて、すべての生きものの中で一番強い力を持ってしまったが、だから、他の動物に対して、深い思いやりを持っていないくはならない、と思う。

はな子について、今は多摩動物公園で働いている山川宏治さんに、質問して答えをいただくことができた。とてもお忙しいのに、すぐに丁寧に答えてくださった。最後にその一問一答を記して、私のはな子の記録を終わりにしたい。はな子、ありがとう、これからも幸せに。また会いに行くね。

山川宏治さんへの質問と答え

〔問〕

はな子を飼育していたとき、一番思い出深かったこと、忘れられないこと、はな子らしいと思ったことなどを教

えてください。

〔答〕

思い出深いこと——。はな子と初めて仕事で接したとき、それまで経験したゾウの行動と、はな子の行動が違っていたこと。ゾウが威嚇する行動が、はな子の場合、威嚇ではなくて親愛や融和の行動でした。複数の群れで飼われているゾウの関係は、ゾウ同士・社会で作られています。喜怒哀楽を伝える手段は、仲間の中で伝播されて使われていくものです。はな子は、一頭で生活する上で、人間と意思伝達の方法を作り出したのだと思います。いろいろなはな子の思いの中で、意思疎通の手段をはな子なりに飼育員に伝えているのです。その伝播方法が本来のゾウ社会のルールに反した使い方であつても、それが自分をアピールする方法だったのでしょう。それを理解してからはな子と飼育員の関係は急速に近づいてきました。はな子らしいことは特にありません。私の知るいろいろなゾウと何も変わりません。自分を中心に序列をつけ、一番好きな人、二番目に好きな

人……自分が従う人、従わせる人と区別することは、動物でも人間でもあることです。はな子も同様に順番をつけて暮らしています。

〔問〕

はな子はふつうのアジアゾウより知能が高いのでしょうか。好き嫌いが激しい、気性の荒いゾウなのでしょうか（よいとか悪いという意味ではなくて、一般のアジアゾウに比べて）。飼育が特に難しい性格のゾウだったのでしょうか。

〔答〕

はな子は、特別なゾウではありません。ただ、自分が生活している空間で一生懸命生きています。過去を考えたことも、未来を考えたこともないと思います。今を生きることを考えているのだと思います。

〔問〕

はな子に、私たち一般の人がしてあげられることはある

でしょうか。

〔答〕

温かく見守っていただくのが一番いいと思います。はな子が寒いだろう、暑いだろう、お腹がすいているだろう、といろいろ思う気持ちがあると思いますが、担当している係員はみなと同じ気持ちで日々接し、はな子に一番良い方法を考えています。皆さんが不満に思うところは多々あると思いますが、限られた予算の中で最大限の努力はしていますので、温かく見守ってください。

〔問〕

はな子が喜ぶことは何でしょうか。

〔答〕

今はできませんが、はな子の横ではな子に寄り添って話しかけたり、一緒に遊んだりしてそばにいてあげることが、ひとりぼっちの寂しさを癒せるのかと思います。ほかのゾウのところへ移動させるのは、ゾウ社会を知らないはな子にとっては、ストレスを感じるかもしれません。

ん。

〔問〕

お父さんの山川清蔵さんとはな子について話したことは手がぎを大切に、ということのほかにありますか。あれば、教えてください。

〔答〕

そうですね。父親とは話すことがありませんでした。今ならいろいろなことを聞いてみたいですね。

〔問〕

はな子に会いに行くことはないですか。

〔答〕

今は行きません。飼育係員には昔から暗黙のルールがあり、もとの担当動物には会いに行かない。それは、新しい担当者に早く慣れてほしいからです。はな子と新しい担当者の前に私が現れたら、はな子が困ってしまうでしょう。

〔問〕

はな子にしてあげたいと思われれることはありますか。

〔答〕

はな子が喜ぶこと、という問いへの答と同じです。今は夢ですね。

〔問〕

はな子へ、はな子を見学に行く私たちへ（マナーを含めて）メッセージをお願いします。

〔答〕

戦争がなければ、上野動物園での戦時下猛獣処分はなかった。しかし、戦争は現実にあつて、ジョン・トンキー・ワンジー（初代花子）は処分されてしまいました。戦後、ゾウを見たいと当時の子どもたちが運動を起し、戦後初めて上野動物園にインディラとはな子が送られてきました。戦争がなければ、はな子は故郷で楽しく仲間と生活していたかも？ 皆さんと私の平和への願いが「はな子」です。

参考文献

『父が愛したゾウのはな子』

山川宏治著・現代書林刊

『祝60歳 はな子おめでとう！ 2007』

（東京動物園協会 井の頭自然文化園発行）

朝日新聞、読売新聞

（一九四九年 八月・九月、他）

取材協力

井の頭自然文化園

多摩動物公園・山川宏治さん／近藤奈津子さん